

つてゐるのであるが、最も重要な特質はやはり現實の描寫である。此の種の劇の大立物は、無論イブセンであつて、近代劇の父と言はれてゐるのであるが、その作品に具はる特色を挙げると、おのづから近代劇の註釋になるのである。蓋しこれらの劇は我等の日常生活の劇であつて、ヒロイックライフの劇ではない。その脚色も科白も、共に日常の言動の通りにする。所謂セリフがよりで言つたり、見えや圖を切るなどのことはない。事件の経過も一代記風とか御家騒動風とかでなく、概ね短時間の事件で、僅かに一日中の出来事又は一夜の出来事に止まり、極端なものになると、女優が興行を終つて次の興行地へ出發しようとする時の三十分間の出来事だけといふのがあつた。舞臺面も一家の内に收まつて、三幕物なら三幕が皆同一の室を出すものさへあつた。道具も平凡な室内家具で済まし、テーブルと椅子二三脚と石油ランプとで済む場面もある程で、出

場人物の數も至つて少數、扮装も極めて自然素朴である。イブセンは「我が劇曲は奥の奥の壁を一方だけ取拂つて内部の模様を見物人に見せるのである」と言つたさうだが、近代社會劇の總べてが此の傾向を有つてゐる。畢竟日常生活の平凡にして眞實な事件をそのまま取扱つて見せる生きた劇である。

眞實であり、生きた事件であるが故に、これらの劇曲は何等かの意義を有ち、見る者をして深く考へしめる。作者は唯人生の一斷片ともいふべき短時間の出来事を提出するだけであるが、見る者は長い過去と將來とをこれから暗示せられ、色々の問題を與へられる。そしてこれが解決を任せられる。而もその問題は、すべて餘所事ならず感ぜられる現實の問題である。自己の生活に關する適切な事例を提供せられ、その批評をも聞かせられるやうなものだから、見る者は自然により善い生活に赴く

やうに刺衝を受けるのである。

斯の種の劇はおのづから長曲たるを必要としない。人生の回轉機に當るやうな、きほどの事件の勃發しさうな刹那を捉へれば宜しいので、その前後は自然と想像がつくやうにするから、大抵短曲で事足りる。事足りるのみならず、短曲である方が集中的の緊張味があつて、却つて効果を高める。幕が上るといきなり主人公が出て、事件の中心に立つて唯ならぬ言動を見せる。一幕の運びの中に自然と事の由來を明にして行く。由來が明になると同時に、ぬきさしのならぬ必至的の運命に陥つてゐることが分つて来る。分つて来ると共に急轉直下で終結の大破裂が来る。此の様式で行くと幕数は極少くて済む。多くて五幕、並で三幕、少くすれば一幕でよろしい。近代劇に一幕物が多くなつたのは主として此の由縁からである。此の様式は、西洋では近代の悲劇に用ひられる嶄新なも

のになつてゐるけれども、日本の劇文學では、既に近松の世話淨瑠璃にある型である。否淨瑠璃よりも先きに、謡曲に通有の型であることを注意しなければならぬ。

鷗外の譯したものは、「寂しき人々」の五幕を始め、「ボルクマン」の四幕、「アラ」幽霊」の三幕、いづれも近代式の短曲であるが、わけて一幕物を二十篇も出してゐることは、右に述べた様式上の特質を我が文壇に知悉せしめる上に、大きな効力があつたので、これにも啓蒙の現象が見えてゐる。謡曲の昔から日本に有つた型でも、その意義を新にして現はれると、恰も全く新しい様式のやうに感ぜられるのである。

社會劇はまだ啓蒙期に在るので、作家も作品もまだ貧弱である。逍遙は明治のシエークスピアであると言へるけれども、大正のイブセンと言へる人はまだ出ない。

一四 青年の文學から壯年の文學へ

明治の文學も大分年取つて來た。もう壯年期に達したのである。壯年期に達したといふのは、年數を経過したことだけをいふのではない。文學の性質そのものが壯年期的になつたことを指すのである。文學そのものの性質が壯年期に達するといふことは、文學の作者が壯年になつたと直接に關係するのである。

文學作品には人氣の多少といふことがあり、流行の大小といふことがある。それは讀者の多少、賣高の大小といふことに關するのであるが、文學の讀者といふものは、昔も今も大體に於いて青年が大多數を占めて居り、購買者も亦さうである。だから人氣とか流行とかは、概ね青年讀

者にもてるか否かによつて定まる。作者から言へば、青年讀者の同情を繋いでゐる間は人氣があり、流行兒であり得るのである。

そこで青年讀者といふものの性質が、文學の消長に至大の關係を有つことになると同時に、作者の年齢といふことが、文學の性質に密接な關係を有つことになる。この二つの事實が如何様に組合はされて、如何様に我國の文學に影響して行くかは、可なり興味ある文學史上の現象である。作者から言つて、大略幾歳頃までの作品が青年讀者を引附け得るか、讀者から言つて大略どの位の性質の文學までを愛讀し得るか、これらを事實に徴して考へて見ると、明治大正の文學に對して一種の側面觀察が成立つのである。

ロマンチズムからナチュラリズムへ。此の進展は十九世紀の西洋文學史上の事實であつて、文學そのものの變遷が正にかくあらねばならぬ

やうに見えるのであるが、實は作者の年齢の青年から壯年へと進むによつて引起される作品の性質の變化であるとも考へられる。同時に又讀者その人の年齢も作者と共に長じて行くところから、おのづから其間に理解が出来て行くが爲に、斯くの如き文學の變遷が時代の潮流になるのだとも思へる。明治二十年頃に曙光を放つた我國の新しい文學も、これと同様の事情のもとに、作者と讀者との年齢の進むに伴うて、遂に四十年代の文學になつたのではないか。

詩から散文へ。此の變化は歐米近代の抒情詩界にも劇文學界にも見える現象であるが、これも文學そのものに起るべき當然の變遷のやうに見えるけれども、作者一個の心理的進展の上にも、詩を棄てて散文に入るべき時期があるのである。律語文學を棄てて散文文學に移ることを要求する機會が來るのである。青年期は詩の時であり、律文の時である。壯

年期は散文の時であり、無律文の時である。これは讀者に就いても同様である。明治大正の新休詩の發展と變化とはその著しい例であるが、詩人から小説家に變るといふことも、作者個人の身の上についた適切な例である。

明治以後の文學の進んで來た道を顧みると、大体に於いて現實描寫の一筋に集まつてゐる。逍遙の提唱した摸寫、紅葉等の作風である寫實、子規等の標語である寫生、四十年以後の文學に於ける現實、これらは總べて略同一の歸趨を有つもので、之を一語に約して現實の道といへるなら、明治文學の大道は即ち現實描寫であるといへる。然しながら同じく現實描寫と言つても、其の觀察の深淺、其の研究の廣狹、其の描寫の精粗等は必ずしも一樣でない。現實そのものの解釋は云ふまでもなく、現實に對する態度に就いても、甚しくその趣を異にしてゐる。而してその

差異を年代的に見ると、それがちようど人間の年齢の進み方と相伴ふのである。

明治二十年前後に文壇の新人として出現した作家達は、何れも二十歳前後の青年であつた。試みに明治二十年に於ける年齢を算へて見る。逍遙の二十九、鷗外の二十六は最も長じてゐるが、二葉亭は二十四、紅葉露伴子規は同じく二十一、透谷と美妙齋とが二十で、皆人生の春であり、詩の時代であり、希望の時代であり、感情の時代である。寫實を尊び寫生を主とすると言つても、蕭殺の秋氣で人情世態に對する透徹した觀方をすることはまだ出来ない。理知の眼をあけて幻像の破滅を痛切に体験するにはまだ早い。地上の平凡生活を營む人間であることを自覺して、美しい天上の星を歌ふことを止めるにはまだ年が若かつた。作家もさうであるが、評論家も同様で、『六合雜誌』の批評家大西操山は二十四、『國民

の友や『讀賣新聞』の評論家も、多くその年輩であつた。

それが三十五年になると、鷗外は四十一、二葉亭は三十九、漱石は三十六、樗牛抱月獨歩花袋秋聲が三十二、藤村碧楫桐が三十一、泡鳴が三十、柳村虚子が二十九、風葉が二十八、天外天溪有明が二十七であつて、四十年にはこれらが皆三十五歳前後の壯年になつたのである。藤村の小説春には、二十五年頃に於ける青年文學者の群がどんな心境でゐるたかを描いてあるのだが、内部生命を高唱して舊式文藝を排斥し、人生の文學を主張して傳習的の遊戯藝術を攻撃する青年詩人青木駿一を始めとして、その周囲の若い人達は、何れも明治の現實思潮には觸れてゐるのである。而も青春の血潮高鳴りする彼等は、やはり純情のロマンスチストであつて、徹底的のレアリストにはなれなかつた。然しながら年を経るに従ひ、經驗を積むに伴ひ、ロマンスチックな藝術生活と底力で迫つて來る實際生活

との扞格に懊惱するやうになり、終にその青春の夢破れて嚴肅な現實に眼覺めるのである。四十年頃の壯年文學者は、正にその境地に到り着いてゐたのである。

「春」の結末に、主人公岸本捨吉が此の嚴肅な現實に眼覺めようとした時の模様を描いて、友人某が雑誌に書いた文章の相變らず空想的夢幻的なのを「笑はずにゐられなかつた」としてあるが、それは文學觀の進化のためで、ロマンチックの文藝に浸つてゐたものがナチュラリズムの文藝に移らうとする時の心境から來てゐると同時に、岸本の年齢の長じて來たためでもある。此の心境の變遷は、即ち作者藤村の經驗したところであつて、又他の作家評家の等しく閱歷するところである。藤村が文學界に現はれたのは二十五歳、「若菜集」の新体詩を公にした時で、戀を謳ひ詩を歌ひ、天才を稱へ藝術を頌するやうな純情の詩篇を以て有名であつたが、

三十歳「落梅集」の諸篇を出した頃になると、詩題が頗る實際的自然的になり、純情でなくて實行になり、藝術でなくて事業になり、すべて沈靜の調を帶んで考察反省に傾いて來た。戀愛なども、美しい華やかな熱烈しいものでなくして、人生の戦線に立てる者にしんみりした慰藉を與へるものと取扱はれてゐる。「壯年の歌」勞働雜詠などは此の標本である。これが即ち作者の心境の現實的になつて來たことを證するもので、正に「春」の記事を裏書するものである。

然るに藤村は尙も之に満足しないで、遂に新体詩そのものを棄てて散文文學に手を下したのである。「落梅集」を出した翌年、「舊主人」「蘆草履」の短篇を公にしてから以後は、専ら小説家として立ち、「爺」「老嬢」「水彩畫家」「津輕海峡」「朝飯」を経て、三十九年に長篇「破戒」を出したのは三十五歳の時であつた。これらの長短諸篇はいづれも美しい詩の題材を取扱つたものでは

なく、人間の内部にこびりついてゐる美しからぬ性情、而もそれをどうすることも出来ない自然の力、人間日常の言動や思考がむしろ之によつて動かされてゐるところの強い存在、かういつたものに著目した作品である。表現の文体も之に伴うて、事實をありのままにボツ／＼と敘して行くやうな風で、散文といふ中でも特に虚飾や誇張を避けたものである。尤も詩人藤村は、自己革命を試みると言つても、一朝にして感傷の甘さを脱却することがむづかしいけれども、之を詞藻華やかな詩篇に比べるに、今迄ほかされてゐた人間の欲情が、可なり露骨に明るみへ寫し出されたことが看取せられる。こゝまで來ると、藤村の文學は、題材の變遷と同時に文學の種類も變遷したことになる。而してこれが又年齢の關係を離れ得ないことである。

花袋の自己革命に就いては、既に述べたが、此の作者も本來詩人であ

つて、獨歩國男玉茗等と共に、「國民の友」に純情の詩篇を出してゐたので、小説を書いても新体詩見たやうな風であつた。それが「女教師」の一篇に眼を覺ました三十六年が三十三歳であり、「蒲團」の一篇に大膽な自己告白を試みた四十年が三十七歳であつて、恰も藤村の「破戒」を著した年齢に相當する。獨歩も同じく詩人から起つてレアリストになつたので、「女難」や「正直者」を書いたのが三十三歳の時である。秋聲は始めから詩人ではなかつたが、「おのが縛」で新潮流に乗り出したのが三十六歳の時である。風葉は硯友社の才筆であつて絢爛の技巧家であつたが、「青春」に作風の一轉を見せ、「戀ざめ」に現實の實相に入らうとしたのが、三十一歳から三十三歳にかけての事である。

詩歌の方でも同様の現象が見られる。星と堇の歌人と言はれた與謝野晶子が、「春泥集」に夫婦生活家庭生活の實際に題材を取るやうになつたの

は、三十四歳の時であり、泡鳴が「悲戀悲歌」に實生活の暗黒面に著想したのは三十三歳の時であり、有明が銀行や鐵工場を詩の中に引出して、「春鳥集」の象徴詩を作つたのは三十歳の時であり、すべて青年から壯年への進程を實證してゐる。

評論界で樗牛は流星のやうに光りながら滅したけれども、抱月や天溪や泡鳴やが、自然主義の文學論をふりかざして出たのは、皆所謂中年の時代である。泡鳴が自然主義的表象詩論を發表したのは三十六歳で、その前に神秘的半獸主義を出したのは三十四歳、天溪が幻像破滅を論じ始めたのは三十一歳、花袋の露骨なる描寫を提唱し出したのは三十四歳、抱月の自然主義論を整理して美學上の土臺を置かうとしたのは三十六歳の時である。わけても抱月の後半生を見ると、文學に對する年齢の關係を明にすることが出来る。抱月は、湧返るロマンチズムの血潮と、冷

えきつた理知の重石との間に、久しく悩みを續けてゐたので、十年若かつたら一擧して血潮に殉じたであらうし、十年年取つてゐたら分別して重石に従つたらうが、その中間にゐる唯今は、何れをも棄てかねて苦痛に堪へないと言つてゐるが、遂に思ひ切つて幻を棄てて實に就き、美しい理想を抛つて眞實の欲求に趨つたのは四十一歳であつた。文藝協會の内訌は中年者壯年者の幻像破滅の悩みに因ること少くはないのであるが、抱月の半生は恰も之を代表してゐるかのやうに見えるのである。

明治四十年代に樹立せられた近代的文學、即ち自然主義的文學は、先に述べたやうに、明治時代を貫通する文學の大道が、行著く所に行著いた現象には相異ないが、それをこゝまで持つて來たのは、作家評家乃至讀者が同じ歩調で年取りながら進んで來たことに由るのである。換言すれば、明治末年の文學は、中年の文學であり壯年の文學である。青年の

若さは失はれて、世の中の裏表を見盡した分別顔の見える文學である。中年の作家や評家は、之を文學の至極として誇り、文學の本流だ主潮だと自惚れ、苟も此の作風に異なるものは、クラシックだ第二流だと排斥し去つた。讀者が之に共鳴し賛同し得る間はそれでも宜しいが、讀者の大勢が一旦之を離れかけると、忽ち文壇の主勢力たる地位を失ふのである。讀者も、評家や作者と共に年取つて來るから、或る點までは歩調を共にして來るが、而もその大多數は、中年に入ると文學の讀者たることを止めるやうな實狀で、壯年の讀者は、もはや文壇に勢力のないものに變つてしまふ。その代りに次代の青年讀者が擡頭して來るのであるが、彼等はこれら壯年中年の文學を見ると、先づ之をぢぢむさく感ずる。潑刺たる青春の意氣から之を薄暗く感ずる。現實の奥底に徹して、その濁りをも渣をもほじくり出して見せてくれるのを痛快とは思ふが、また餘り

に殺風景に感ずる。従つて之に共鳴することが困難になつて、むしろ他の種の文學をと求める。自然主義の文學が下火になるのは、此の關係に由ることが多いのである。

一五 近代文學の一生面

明治四十三年、現實暴露の文學が盛に行はれてゐた頃、「三田文學」と「白樺」との二つの雑誌が發刊せられた。此の雑誌を中心として出た作品は、「早稻田文學」などに出る自然主義的作品と色彩を異にしてゐた。前者は享樂耽美の傾向があり、後者は理想的人道的の傾向があつたのである。同じ頃に谷崎潤一郎、鈴木三重吉、森田草平などの新作家が出て、各自特色のあるものを出した。或者は悪魔的で、或者は浪漫的で、何れも自然主義的のものと作風がちがつてゐた。

「白樺」に出た作家に武者小路實篤、志賀直哉、有島武郎、長與善郎、里見弴などがある。武者小路は四十三年の「おめでたき人」から始めて、創作

にも評論にも最も努めた。志賀は四十五年の「留女」から此の方、小説に優れた腕前を見せた。有島は少しく遅れて大正四年頃から現はれて、多作第一の觀があつた。而してこれら作家の作物を通覽すると、著しい共通點が具はつてゐる。

第一には普通の人情を主とした點である。自然主義の解剖的科學的批評的精神が、動もすれば情を没した冷酷さを有つてゐるのに對し、並の人間らしさを回復したことである。例へばこゝに意見を異にするところから衝突を起し、仲違をした二人の者がゐるとする。特に年齢もちがひ、教育もちがひ、思想もちがふ時には、二人は到底理解が出来ない。徹底を要求し、妥協を排斥する自然主義の考から行くと、二人は遂に調和すべからざるものである。然しながら親身の關係の者なら、いつまでもその状態であることは、堪へられぬ苦痛である。普通の人情からは到底忍

びきれない不自然な有様である。どんな努力を拂つても、之を取除く工夫をしなければならぬ。これが人情の自然の姿である。

第二には愛といふものを靈的に取扱ふ點である。自然主義が生物學的に引ずり降ろした物質的動物的境地から、再び引上げて靈的のところへもつて行くのである。戀愛などは決して種屬保存の本能に過ぎないなどと済ましてゐられる性質のものでなく、もつと深く高いところに根ざしてゐるといふのである。例へば兩性は共に完全な人格の半分だけしか有ち合せてゐないもので、他の半分を見出して結合しようと努力するものだを見る。世の中を歩き回つて其の半分に出會ふまでは、動搖が止まないの、それに出合はせて始めて落附き、始めて納まると考へる。だから一對の男女をしてその人格完成を遂けしめるが爲には、自分の愛人としてゐる者をも、潔く譲り與へねばならぬ。これが即ち靈的の愛にな

るわけである。

第三には愛情の性質が廣汎なものになつてゐる點である。愛は個人的利己的のものと解せられる考へ方に對して、廣く人類を愛するといふ汎愛の意義を有つてゐる點である。己が妻子や愛人だけを愛するのではなく、全人類を愛するのである。だから愛の反面の憎といふものが無いわけである。如何にもコスモポリタンで、銘々の仕事も全人類の幸福を目標として爲されてゐるわけになる。作品はおのづと世界的になつて、國民的又は個性的特色を帯びない。だから日本人のやうな固有名詞を使つてあつても、少しも日本人らしくなく、日本の地名のやうな固有名詞を用ひてあつても、少しも其のローカルカラーが出てゐない。勿論英國人でもなければ佛國の或町でもない、漠然とした世界人であり、茫然とした世界の或土地である。人名などは本來 ABC で澤山であつて、地名も

イロハでよろしいわけである。

是等の共通點は、その善い特性であると同時に、その悪い特質である。然しながら自然主義的の文學の外に新機軸を出したことだけは認めておかなければならぬ。そしてそれが西洋大陸諸國の最近二世紀に亘る文學史上の現象と似通つてゐるところに史的意義を認めなければならぬ。但し此の事は、それが自然主義の時代を通過した後、に到り得た境地でなければ許されない事で、唯の空想や唯の憧憬に過ぎないものなら、それは世間知らずのおめでたい人達のおもちやといふだけのものである。これに比べると「白樺」以外のものは、自然主義の強壓を通りぬけて來たらしい閱歷の豊富さを持つてゐる。世の中は臭いもので、蓋をしたつて無くなるものではないが、蓋を取除けてひつかきまはせば益々臭いばかりである。自然主義の文學のやうに現實を暴露するだけでは仕方がない。

暫くでも宜しい、こんな臭いものの存在しない世界を建立して、そこに生きがひのある生活を營みたいものである。それならこんな世界は實際世の中に在るものか。又は世の中に本當に造れるか。曰く大に在る。大に造れる。次に掲げるやうな文學にそれが見えてゐる。

彼等の或者は、過去の文學に見えた社會狀態の中で、好ましいと思つたものを、今日の世に、自分自身に實現しようとする。假令好ましいと思つても、今の日本に實現せられさうもない社會狀態ならば、それは空想であり、憧憬に過ぎない。平安朝貴族の生活は、いくら好ましくとも、今日自分達に再現することは不可能である。江戸時代の戯作に見える社會狀態ならば、よし安永天明の頃と同様には行かないまでも、或程度まで實現することが出来る。江戸趣味の生活は今の東京でも可なりに實現せられる。これが一つ。

又或者は、同様の要求から、異国情調の世界を建立して、そこに生きがひのある世界を見つけようとする。これも憧憬してゐるだけではない、實際自分の生活にするのである。大体の傾向は江戸趣味を追求するものと似てゐる。又新開地情調を喜ぶ流義も此の類である。これが又一つ。

又或者は、神経の連続的刺戟で快美な世に生きてゐるといふ意識を失はないでようとする。これは連続して絶えないことを必要とする。一瞬でも断絶すると、卒然としていやな世の中を感知するのだからたまらない。片時と雖も神経をだまぐらかして、氣持善からしめるやうな刺戟を受けることを怠つてはならぬ。ボカンとして元の奎阿彌に返らないやうに用心しなければならぬ。無論刺戟は五官のそれであるから、美音よろしい、美色よろしい、美味もとより結構、芳香亦大に可なりで、絶え

ず新奇な刺戟を神経に與へることを努めるのである。これが昂じると、突飛異常な刺戟を求めらるやうになり、變態心理の状態に浸り込んで、やつと一時を満足するやうになり、頗る悪魔的な行き方になる。これが又一つ。

次に又或者は、此の實人生を藝術化して、その技巧的の感興を味ふといふことに生活の意義を見附けようとする。例へばこゝに一人の男がある。相手たる女がかう言つてくれると善い、斯う動いてくれると善いと考へる。自分が斯うはたらきかける時にはかう反應してくれると善いと思つてゐる。幸に注文通りに行つた時に心ゆく生の満足が味へる。女が自發的にそれが出来ぬならば、豫め教へてやつてもよろしい、脚本通りに言つたり動いたりしてくれさへすれば、こゝに生の樂みが湧く。痛ましい生活、くだらない實際生活、そんなものを改造し破棄してしまつて、

居宅を舞臺にし、居室を場面にし、己れ及周圍の人々を役者にして、そこに詩的藝術的技巧的世界を建立するのである。但しこれが唯の幻想であつてはいけない、どこまでも現實の生活であらねばならぬ。そこに同じやうな考へ方でも古今新舊の相異點がある。これも一つ。

斯う擧げて來ると、こんな世界は随分多いものである。色々其の相は違つてゐるけれども、現實の脈はしさを承知してゐながら、之に見きりをつけることなく、絶望の淵に臨んでゐても、そこから引返すところに共通點が認められる。

以上述べ來つたところを總括すると、享樂主義だの、耽美主義だの、惡魔主義だの、人道主義だの、新理想主義だの、新浪漫主義だの、諸種の名前のもとに攝せられるけれども、之を通觀すると、何れも人生を肯定して、どうにか唯今の状態を切抜けて生活の意義を見つけようとして

ゐる。蓋し此の考へ方は、此の世を否定し、ドス黒い厭世觀に落込みたくはなく、絶望的な決定觀に推附けられるのに満足しないところから起るので、そんな時に開かれる一方の血路は、唯どんな方法かによつて人生を肯定する行き方だけである。人生を肯定すると言つても、昔からの樂天觀に通常の空想的な夢幻的な回避的な肯定なら、何等珍らしいことは無いのであるが、一旦否定しなければならぬやうな世相に面接して、その暴露された醜さに戦慄した後、それでもこれをどうにかしようとして立上がつて來る肯定觀なら、本當に世路の辛酸を嘗めたものだけが有ち得る心境であつて、可なり複雑微妙な味に到達してゐるのである。此の種の肯定觀の重味は、一旦否定觀を通過して來てゐるところに存する若しさうであるなら、やはり現實の實相に根柢を置いての考へ方であつて、明治文學の大道には外れない現實重視の文學が出来るはずである。

但し當時出現した文學は、此の點に於いて稍々物足りないもので、今までドツシリした足並で歩いて來た自然主義の文學に對して、更に一步を進めた重みがないのみならず、どうかするとまだ自然主義の難所を踏みも見ない甘いものだと思へるやうなものも無いではなかつた。然しながら、ともかくにも現實暴露の泥海から這上つて來た史的地位に立つもので、將來の發展を期待することの出来るものであつた。

これらの文學と比べると、一見甚しく性質がちがつてゐるやうに見えて、實はその根柢に自然主義的文學と反對の人生觀を抱く點で相通する一種の文學があつた。それは夏目漱石及その一流の文學である。

漱石は本來子規派の俳人であつたが、三十八年始めて散文の文學作家として現はれた。現はれると直ぐに「我輩は猫である」と題する、小説ともつかず隨筆ともつかぬ長篇を出して、文壇に重きをなした。爾來「坊ちや

夏目漱石の筆蹟と其の肖像



夏目漱石の筆蹟と其の肖像

夏目漱石の筆蹟と其の肖像

夏目漱石の筆蹟と其の肖像

んや「草枕」等の短篇を経て、四十二年「それから」等の長篇に移り、大正五年「明暗」を未完にして死ぬるに至るまで、長短の小説隨筆を出して大きな足跡を斯道に残したのである。漱石の作に見える人生は、やはり自然主義的の文學に現はれたやうな苦悶の人生である。然しながらその生き方は、そのいやな世の中にこびり附いて苦悶を續けるのではない。一度は此の境界を脱却して之を客觀し得る心境を作り、更に此の世の中に歸り住んで、その脱越の態度で人生を味ふのである。だから人生に對するに愛憎の差別を現はさない。悠々とした餘裕があつて何物にも拘泥しない廣さが感ぜられる。當時自然主義的文學の全盛時であつたから、此の餘裕のある態度がひどく異彩を放つて文壇を驚かしたのであつた。あつた。

世間では此の態度を稱して俳諧的といつた。それは當つてゐる。人間の生死問題や自己の煩悶苦患をも、月花と同じに眺め得る點は俳諧的で

ある。例へば重病に苦しむ、困憊の極に達する、その心持を文學に作り、その瞬間に文學的解脱の境に入るのである。又例へば世の中は不合理に出来てゐて、持つて生れた正義感を満足せしめない。利欲の肉塊名聞の臭骸、何れを見てもいやになる。これを舞臺上の喜劇を見る氣持で眺める。その刹那そのいやな味から解放せられるのである。此の觀方は即ち俳諧に立脚したもので、江戸時代のものに比べると甚しく嚴肅味を加へてはゐるが、やはり芭蕉の建立した世界を近代的にしたものといへる。

世間では又之を回避的だといつたが、それは當らない。眞正面から人生にぶつつかつて其の苦悶を経験するやうなことは、既に自然主義的文學の方で十分爲し盡してゐる。今更其の中へ飛込むことも要はなく、さればと言つて回避することもいらぬ。恐れず憎まず一段の高所から之を包愛しようと言ふのである。人生の實相は醜であるが、之を醜として暴

露することはもう済んでゐる。之を平かに受取つてその總べてを包愛し、十分の餘裕を以て此の生を味はうとするのである。だから回避的でなくて、むしろ徹底的といふ方が當る。

漱石が「それから」を出し「門」を出した時、自然主義風に變つたと言つた評家があつたけれども、それは此の肯定的態度を見逃した爲の誤りである。東洋風の特に日本的の對人生の態度であつて、新理想主義とか、新浪漫主義とか、人道主義とか、すべて西洋文學に見られるイズムの名稱を之に當てはめるのは無理であるが、絶望せず、ヤケにならず、靜に生の味ひに徹しようとするところは、正に肯定觀の文學である。而して肯定觀の文學としては、大正の初頭までに出たものの中で最も特色のある、又最も見ごたへのあるものであつた。それは現實のどん底を見極めて來てから、さて之を振返つて眺める境地に立つてゐるからで、即ち自然主義

的の難所を經過してしまつてゐるからである。

以上述來つた文學は、明治の終に芽を出したものであるが、大正に入つて段々生長して來て、自然主義的の文學が行詰まつた頃から、おのづと之に代るやうな形勢になり、中年以上の評家や作家が自然主義的の立場から烈しく非難し擯斥したに係はらず、青年讀者の同情を集めて漸次文壇の大樹と繁茂したのである。但し此の類の文學は、自然主義的文學の時代のやうに一種類に統一せられてゐないから、おのづと紛雜混亂して見えるので、どうかすると共通する根柢を見落すやうになるのである。

一六 人生肯定の文學

此の類の文學は、自然主義的の文學に對する反動の性質を有つてゐる。其の出現は必ずしもそればかりに因るのではないが、出てからは反動の勢に乗つた氣味が無いではない。此の點で、これらの文學は、西洋文學史上二十世紀の初めに出た新文學の性質に似てゐる。日本文學の變遷は、西洋文學の歴史と同一の徑路を取るとは定まつてゐないが、自然主義以後の文學の潮流は、會々似通つた状態に在るのである。蓋しナチュラリズムの文學は、事物の眞相を表出するに遺憾は無かつたが、どうもいやに學術的で、殺風景で、味もそつても無いものが出來たりした。中には人生の眞相を描寫しようとしながら、却つて人情の自然に遠いものが出

來たりしたのである。極端まで推して行つて行詰つて、こゝに反動が起つたのである。こゝで又西洋文學とのパラレルが引かれる。

ナチュラリズムがどうして行詰まつたか。それは第一に、科學的の人生觀が世の中の不思議の滅絶しないのに閉口して身代限りをした事に由るのである。第二に、この種の文學作品に取扱ふ題材は、確實なファクトに相違ないが、人間といふものは現に在る通りの事實では満足しないもので、日常平凡の事物以外に、偉大な事、英雄的な物を要求し、醜惡暗黒な事物の外に光明的な快美な事物が欲しく、現實的なものばかりでなく、理想的なものも有りたく思ふのであるから、文學の題材にも之を要求するやうになつたのである。第三に、科學的研究法で精細に探究しようとはしたが、人生には他の生物や自然界の事物のやうに實驗といふ方法を適用することの不可能であることが分つて來たのである。同時に描

寫法に就いても、人格を没した客觀寫實は到底出來ない相談であつて、心を明鏡止水にするの、無念無想になるのといふけれども、それは畢竟論理的の遊戯だといふことが分つて來たのである。

此の行詰りから反動を引起したのが、西洋では大略一八八九年前後といはれる。それはフランスやベルギーで、理想主義、唯心説、自由意志論に關する著書や創作が頻りに出初めた時を指していふのである。此年あたりを回轉軸として新しい世界が開けて來て、フランスは勿論、ロシア、イタリヤ、ドイツ、オーストリア、ベルギー、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンなどの大陸諸國は、すべて此の仲間入りをなし、ナチュラリズムの流行に外れてゐたイギリス、アメリカまでも此の新潮を汲むやうになつた。

大體に於いてナチュラリズムの反動であるから、主觀唯心の思潮の復

活となつて現はれるはずである。即ちナチュラリズム以前に榮えたロマンチズムの復興となるわけである。然しながら以前のロマンチズムがそのまま再興するのではないことは言ふまでもない。むしろナチュラリズムを併合した新しいロマンチズムの興起といふ方が適當である。即ちナチュラリズムの破壊的精神や、消極的悲觀的的人生觀や、無理想無信仰の生活や、醜惡病的な事物の描寫などを抜きにして、ロマンチズムの理想主義、情緒主義、内容主義、獨創主義、直觀主義などを取入れたものと見てよろしい。此のイズムを Neo-Romanticism 又は Neo-Idealism と名づけるのは、これらの特質からである。

此のイズムの人生に對する態度は、何よりも先づ之を肯定することである。この生を愛し、この生を創り、生ほし立てて行かうとすることである。即ちすべてナチュラリズムの否定憎惡破壊の反動である。「生れ、

現はれ、滅ぶ、此の中の一番後の語を忘れてしまへ、人間は死なないものと考へて生活し、唯今の刹那が永遠に續くものと考へて之を味ふが善い」といふのは、即ち此の人生觀を端的に言現はしたものである。だから宗教を取るにしても、現世に活動することを基礎とするものを取つて、従來のやうに未來の救済を主旨とするものを取らない。ナチュラリズムで破壊せられた宗教といふものが、新たに復活するにしても本のまゝではいけない。エレン・ケイの宗教觀などが好い例である。又自我の觀念が益々強烈にはなつて來るが、權威の破壊だけで満足しないで、新生活を建設しようと努力するやうになる。ロマン・ローラン等が廣い愛を唱へるのは、人類愛を以て此の世を改造し、自我を基礎とする新生活を楽しむことが出來るといふ考へからである。無論これは、ナチュラリズムの否定觀を一旦味はひ來つた後に到り得た境地であつて、世の中を知らない

坊ちやんの空想では無い。

次に、此の人生觀の特色とするところは、唯心唯物の混一、靈と肉との一致といふ點にあつて、ナチュラリズムのが専ら唯物的肉体的であつたのと違ふのである。これには色々種類があつて、一概に考へると誤解の起る處がある。此の世は無趣味であり、不愉快であり、醜惡であるから、せめて自己の快樂だけでも求めて、それに生きがひのある人生を見つけようと努力するのも、其の一つである。これは一寸見ると安つほい樂天觀のやうであるが、實は絶望的な世の中でも直ぐに見切りをつけないで、一度は見直して行かうとする根氣な努力があるのである。又一寸見ると怖ろしい世の中に面と向ふのがこはくて逃廻る卑怯な觀方と考へられるけれども、よく調べて見ると、死ぬかヤケになるかの瀬戸際をやつと踏みこらへて此の世にへばりつき、飽くまで快樂を食つて、一刻の

油斷なく新たな刺激を求め、自分に與へられる總べての快味を吸取らうとする積極的な見方である。

又、心靈界の神秘は不可知なものだとして諦めるにも及ばず、神秘は無いものだとか多寡をくもるにも及ばない、人間には肉の世界から靈の世界を覗きこむ直觀といふ力がある。これによつて髣髴と事物の本体を見ることが出来ると觀するのも其の一つである。之を見るのは無論科學的の明晰さからでなく、漂渺たる情調の中からである。無形の實相を有形の事物に寄せて見るのである。肉の中に靈を見るのである。即ち靈肉の合致した觀方である。

又、科學的研究を尊重して生物進化の學說を承認はするが、それがために宿命觀に陥らないで、更に人間以上のものに進化しようとか心がける行き方もその一つである。人間は進んで現在のものよりも優越な健康と

頭腦とを有するものに爲らねばならぬ、少くとも人の中の英俊になり、更に進んでは人の中の神にならねばならぬといふのである。

又、唯物的宿命的の人生觀では、自己を否定してその生滅を盡けらの生死と同様に見てゐるが、生命は捨てたくない、生きられるだけ生きたいから、生活を改造し人生をより善くしてその中に長らへ住まうといふのもその一つである。之はナチュラリズムが捨てた理想といふものを、復た拾ひ上げたのである。生命の愛、人間の愛、人類愛、人生愛、すべて獸道に對する人道を行かうとする人生觀である。

以上述べるやうな人生觀を抱持してゐるのであるから、その題材として取るものは大略推定し得られるのであるが、試みにナチュラリズムの文學に見えなかつた事物に就いてだけ調べて見よう。

第一に、心靈の力を描き、靈魂の覺醒を寫し、ナチュラリズムに虐け

られてゐた人間のたましひの人生に於けるはたらきを書き出すのである。但し此のたましひは、肉と離れてはたらき、肉を苦しめて始めて光輝を放つと思はれてゐる舊式の靈ではない。肉の中に宿り肉と共に消長するもので、どんな惡黨にも、どんな困窮の中にも、依然として光り輝くものである。

次に、神秘の境地不可思議の世界に著目し、科學の限界の外にあつてナチュラリズムの眼力の及ばない事物を取扱ふのである。人間の能力にも豫感だの、直覺だの、透視だの、夢想だの、奇蹟だのと、種々の不可思議のものがある。又人間生活にも五官で知覺し得ない、靈魂だけが到達し得る神秘の世界がある。それを感得し來つて表現するのが最高級の文學である。つまり事實を知り盡して、それによつて其の奥にある實體を見ようとするのであるが、それは科學的研究や論理的推測ではだめ

であつて、主觀の力で直覺するより外に方法がない。而して其の實體なるものが即ち事實の生命であり意義であつて、これがなければ自然主義の方で尊重する事實といふものも、大に價值を失ふのである。事實といふものは唯實體を象徴するところに意義を有つので、従つて現實界は心靈界の象徴として、肉は靈の象徴としてその價值を保つだけである。だから目に見ゆる世界だけが現實でなく、見えない世界が必しも夢幻でない)ので、見えないところにも現實は存する。これが舊式のロマンチズムの神秘と違ふところで、二者の區別は、現實の上に立脚してゐるか否か、ナチュラリズムを通過して來てゐるか否かにあるのである。此の題材を取扱つたのを Symbolism の文學と言つてゐる。

次によく取られる題材は、人工の世界、技巧の生活であつて、現在の世の中は厭はしく住むかひもないから、自分だけにでも氣持の善いやう

な世界を求めて、こゝに生きがひのある生活を營まうといふのである。實物の女の顔よりも繪に書いた女の方が好きだとか、本ものの水や樹よりも芝居の舞臺に使ふ拵へものの方が好きだとかいふのは、病的な嗜好だと言つてしまへばそれきりであるが、本物に愛相をつかした時には、誰れでも反動的にこんな心持になるものである。藝術を實生活に移すなどもこの仲間であつて、昔風に此の世ならぬ別世界として藝術の天地に遊ぶのでなく、自らの生活そのものを藝術化するのである。又突飛な異常な強烈な刺撃を持続的に神經に與へて、之を昂奮せしめ緊張せしめて、そこに生きがひのある生を享樂しようといふのもその仲間である。こんな事は一種の變態心理で、近代文明の生んだ病的状態とも見えようけれども、マックス・ノルダウが躍起となつて非難するほど悲觀すべきものでもなからう。神經質ではあるが、普通ならば到底堪へられさうにもない

強い刺撃に堪へて行くのだから、却つて神経が強いのだとも言へる。又同じ仲間に、現前のいやな生活を避けて、過去の世に見る生活、異國に見る生活を模倣したり實行したりして、そこに生きがひのある生活を求めようといふのがある。これも昔風に別天地に心を遊ばしめるといふやうな空想的なものではない。まして古人を友とするなどといふ殊勝な心がけのものではない。憧憬だけでなく本當に己れの生活にするのである。此の條の文學は、或ものは *Aestheticism* と呼ばれ、或者は *Diabolism* と呼ばれ、或者は *Decadents* と稱せられてゐる。

次によく出る題材は情意生活であつて、これはナチュラリズムの理知偏重の反動である。但し情意を取扱ふと言つても、前のロマンチズムのやうに理知を輕視するのではなく、どこまでも經驗に立脚し知識に基礎を置き、聰明な知力を働かせて冷靜嚴肅な態度で之を取扱ふのだから、

狂熱とか盲動とか、感傷とか頹廢とかに陥らない。愛情を取扱ふにしても、戀は神聖だとしてすべての物の上に置くとか、戀人を崇拜してその前に跪くとか言ふやうな風でなく、人格の完成のために自己の缺陷に補充を求めるのであるとか、兩性の接近には性愛の外に友情が存するのを認めるとか、すべて理知で裏づけられた情意の動きを観察するのである。

又、ナチュラリズムの文學が、有るがまゝの世の中を描いたのに對し、あらねばならぬ世の中を寫すことを特色と見なければならぬ。これも黄金世界を空想したり、古の盛時を追懐したり、此の世以外に天國や極樂を憧憬したり、未來に淨土や樂園を期待したりするのでなく、現在の生活の上に實行し、渾身の努力で之を實現するのである。單に精神的に其の境に入るのではなくて、心身同時に、肉靈共にそれを獲得するのである。これには又色々の種類がある。ニイテエが人類の進化を認めて超人を説

いたのもその一例である。ニイチエの考へ方が日本に紹介せられたのは、ナチュラリズム風の文學の行はれるよりも以前であつて、樗牛の文明批評家としての文學者を書いたのは、三十四年のことである。恐らく當時にあつては、ニイチエの思想上乃至文藝史上の地位を正當に理解することはむづかしかつたであらう。自然主義の主張者が、ナチュラリズムをニイチエよりも新しいと信じてゐたほどであるから、ニイチエの思想の思想的文藝的地位を理解しての論評が少かつたことは、想像するに難くない。無論ニイチエほどの人は、色々の方面から色々に觀らるべきもので、一方に片つけることは無理だとも言へるが、大休に於いて新浪漫主義乃至新理想主義の中の一つと見ることが出来るのである。又イブセンが劇に第三帝國、即ちギリシヤ・ローマ風の唯物物でもなければガリア人の唯心でもなく、キーナスやデオニソスの帝國でもなければゴツ

ドやキリストの帝國でもなく、自己の優越を知る人間の肉靈一致の帝國を説いたのも、其の一例である。イブセンはロマンチズムからナチュラリズム、更にネオ・アイディアリズムと、近代文藝史上の變遷を一身に體してゐるのであるが、三十四年月郊の翻譯が出た時分は、そんな意義など少しも知られてなかつた。樗牛の評論に出た時でも尙その通りであつた。三十九年彼れの訃音の傳はつた頃になると、その自然主義的の一面だけが、やつと我が國に知られたのである。然し彼れの晩年の作は神秘的象徴的で、二十世紀の新浪漫主義の風格を具へてゐるのである。又彼のトルストイやドストエフスキイがナチュラリズムが捨て去つて顧みなかつた理想を拾ひ上げたのも、その一例である。トルストイの我國に知られたのは、二十四年頃であるが、その作品がこんな地位を占めるものだと、曾て思ひ寄らなかつたドストエフスキイの「罪と罰」が翻譯せられ

たのは、二十五年であるが、此の人の作が、あるがまゝの人生を觀て、其の醜惡を知り盡しながら、之を捨てず、どこまでも愛護して之を改造しようとするものだとは何人も知らなかつた。トルストイは貴族中の平民主義者、「罪と罰」は探偵小説の高級なものといふ位の理解でゐたのである。けれども彼等の作の中心思想は、何れも現實の上にしつかりした足場を置いた理想主義であつて、即ち新理想主義の中に數ふべき第一のものである。又かのロマン・ローランの題材は最近に於ける著しい例であつて、悲觀すべき人生に出遭つて之を避けたり棄てたりすることなく、まともに之に對向する勇氣を振ひ興し、悲痛な運命と奮闘して之に打勝たうと努力する實行生活を描寫してゐるのである。此の作者の我國に知られたのは、上述の人々とちがひ、新氣運がめぐつて來てからの事で、言はゆる眞勇主義など全く新しい發見である。此の考へ方は、人生の暗黒

な一面と光明の他面とを併せ觀る者でなければ爲し得ないだけでなく、暗黒の一面の中にも内部に潜む光明を認め得る者でなければ爲し得ぬところである。肉の生活にも靈を見、肉体の運動にも思索の影の躍動するを觀取し、濁穢の中にも清淨を認め、俗の中にも雅を發見し得る者でなくては、爲し得ぬことである。以上述べたものは、或は新浪漫主義といはれ、或は新理想主義といはれ、或は Humanism といはれる文學の取る題材である。

右の題材を一步進めると、文學特有の世界から人生の巷に出で、實行世界を取扱ふことになる。象牙の塔を出て實行の生活に入るわけである。人生派といはれるのは此の類のものである。國家、社會、政事、軍備、産業、勞働、民衆、娛樂、その他諸種の實際問題を取扱つて、之を愛し之を楽しみ、熱意を以て現前の生活を遂げる勇氣ある事實を描寫する。

人生とは何ぞやといふやうに、その目的や意義を云々する代りに、直ちに實行生活の内容に立入るのである。此の傾向は、ロシアを發祥地として世界の各地に弘まりつゝあるので、ロシア近代の小説戯曲は本來客觀的に解剖分析を試みるナチュラリズム風でなくて、人間を離れず社會事情を離れぬヒュマニズム風の傾向を有つてゐたのである。

一七 暗示の文學と理想主義の文學

此の類の文學は、その創作に方つて、題材の研究調査に精細な確實な方法を取ることは、ナチュラリズムの文學と同様であるが、唯その方法の可能に限界のあることを承知してゐる。世の中にはその限界以外の不思議な事柄がある。それを知り明らかにするには、科學的客觀的研究だけでは覺束ない。どうしても直觀の力を借りなければ出來ないことがあると考へる。直觀に由るのだから、科學的研究のやうなまだるっこしい順序と方法とを具へた組織的のものでない。一舉して事物の生命をつかむ綜合的のものである。ナチュラリズムのやうに人生の斷片を描出するのでなく、絶えず流動し進展する人生の全体を直觀して、その中心生命をつ

かみ出すのである。

かくの如き制作方法を取るのだから、之を表現する手法も、如實と精細とを主とした寫實的描寫だけではもの足りない。事物の微妙な内容、心靈の幽玄なはたらき、神秘の世界の不可思議の實相は、口舌の能く寫し文筆の能く描き出し難いかどを有つてゐる。そこで已むを得ずその雰圍氣を描き、その情調を現はし、その中に髣髴として作者の直觀し得た實体を暗示しようとする。即ち寫實的筆法だけではいけないから、暗示の筆法を用ひるのである。而してその描くところの雰圍氣は即ち客觀の事物であらねばならず、情調も亦具體の事物で表はれねばならぬ。その客觀の事物、具體の事物を通じて今描き出さうとする題材の實相、靈魂、本体を暗示するのである。此の場合に取られた有形の事物を名づけて象徴といふのである。これは描寫法としては最も微妙なものであるから、

説明解釋はむつかしいが、用ひる手段が巧妙に行くと、その外のどんな方法よりも善く當てはまつた表現になるのである。

制作上の此の技巧は、詩にも用ひられ、小説にも用ひられ、脚本にも用ひられる。ホフマンスタールの脚本に「チ、アンの死」といふのがある。大なる畫家の死を描くのを主題としてはゐるが、舞臺にはチ、アンが出て來ない。舞臺上に見る客觀の事物は、すべて大人物の死が人心に與へる動搖不安の心持を表現するものであつて、即ち無形の不安動搖の心持を暗示する象徴として描き出されてゐる。小説や詩にも各々此の例があるのである。此の技巧が我が國に行はれ始めたのは、詩の方からであつて、二十九年の頃既にフランス象徴詩人の作品が傳へられ、三十一年にはそれらサムボリストの作風が紹介せられてゐた。然し當時はまだ研究として解説として發表せられてゐただけで、作家の中心の要求から、作

詩の上に實際に用ひたものではなかつた。爾來此の新しい技巧が、フランス近代詩人の作品の翻譯によつて其の用ひ方を指南せられ、追々實地に試作するやうになつた。其の翻譯で斯界を刺撃したのは、上田柳村であつて、三十九年に出した「海潮音」がその記念であり、創作に用ひて斯界に先鞭をつけたのは、蒲原有明と薄田泣菫とであつて、三十八年の有明集「春鳥集」と三十九年の泣菫集「白羊宮」とが其記念である。「海潮音」にはボルドレエル、エルレエン、エルハアレン、ローデンバツハ、レニエ、モレアス、マラルメを始めとし、フランス、ベルギーの象徴詩人の作を紹介し、「春鳥集」には三十七年頃から試作した象徴詩を収めてゐる。その自序に言ふ。「自然と我とは一なり。自然の呼吸を我に感じ我の影を自然に見る。既に詩想に此の新意あらば、其の表現に新なる方式を要するは自らなる勢なり。かの音節格調措辭造語の新意に適はんことを求むると共に、邦

語の制約を寛うして近代の幽致を寓せ易からしめんとするは、海に已み難きに出づ」と。又「白羊宮」には三十八年以來の象徴的の作を収めてゐる。多くは自然物に人間生活の趣致を寓せたものである。以上は皆まだ試作に屬するもので、技巧としてもまだ完全でなく、晦澁朦朧といふ謗りを受けないわけにはいけなかつた。つまりフランスのデカダン派の詩風を摸倣したもので、變轉期の時流に乗じたに過ぎないから、おのづと其の弊が見えるのだとも言へるが、其の神秘的、主我的、官能的、現實的な特色は、やはり近代新傾向の作風として認めなければならぬ。四十一年「有明集」が出た頃になると此の技巧も著しく進んでゐる。

文章に就いては、ナチュラリズムの文學が、無技巧、無飾、露骨、平面的といふやうな標語の示すやうな新しい文体を用ひたのに倣つて、ナ

体は慣用の技巧を排し舊式の修飾を斥けて、平易自由なスタイルが工夫

せられてゐる。但しその新工夫は、常に事物の實相を表現しようとする努力なのであるから、時代を下るに従つて益々微妙になつて、色々の修辭法が現はれて來るのである。

此の種の文學は、自然主義的文學の冷嚴さを、ロマンチズムの詩趣で和らけたものであるから、文學讀者に對する關係は甚だデリケートである。曩に述べたやうに、文學讀者の多數は青年であるが、青年は概ね感情的で、感傷し感激する素質に富み、純一純真で正義感が強い。又多くは精神的靈性的で多く神性を保有し、理想的空想的で常に未知の世界を翹望し憧憬する傾向を有つてゐる。これらの特性は、それぞれ中年以後の人間の概して理知的で妥協性を有ち、物質的肉体的で動物性をも保ち、現世的散文的で實用に傾くの比べて、一層明かにせられる。此の特質が即ち青年の若々しさである。此の若々しさを有つ青年讀者に愛好

せられる文學は、おのづと此の特性に適合するもの、又は此の特性を有する人物を描寫したものでなければならぬ。

自然主義的文學は、その現實暴露の深刻さと教權破壊の痛快さで、一時青年讀者を動かしたとはいへ、冷嚴な態度、荒寥な人生觀は長く之を引つけて置くことは出来なかつた。その間の距離が漸次大きくなつて、遂に二者は離れてしまふやうな現象が見られた。獨歩の作がその文名に伴ふほどの讀者を得なかつたのは、別段の理由によるとしても、花袋が大正七年に出した「殘雪」が一部中年の讀者を除いて一般的に何等注意を惹かなかつたのは、讀者の多數を占める青年の心を離れたからだと見るこゝとが出来る。藤村の大正六年に出した「新生」も亦之に準じて考へられるものである。秋聲の筆が大正年間に入つて、「爛」から「あらくれ」へと益々圓熟して來るに係はらず、讀者を得ることの思はしくないのは、是亦青年の

若々しさを缺いてゐるからである。抱月の評論の情理を盡した筆致は容易に他の追隨を許さないものであるが、その落附拂つた中年の趣味は、これも多數讀者に味解せられなかつたやうである。

此の點に於いて新理想主義乃至人道主義の文學は、青年の若々しさを具へてゐると言つてよろしいもので、従つて多數讀者の共鳴を得る要素を有つのである。先きに自然主義的文學の青年讀者に喜ばれた點、即ち教權破壊の痛快さや、原始的な簡素な自然状態に復歸することのすがすがしさや、自我の尊重正義の主張等の小氣味よさなどといふ點は、此の新理想主義の文學にも存在するところで、特に自然主義的であるから喜んだのではなかつた。之に反して新理想主義等の文學では、これらの特質を備へてゐるだけでなく、其の上に青年の若々しさを有つてゐるのであるから、一方に經驗的知識を過度に尊重し、平凡醜惡な現實生活を過

度に價值づけ、虚無的宿命的科學的機械的的人生觀を過度に唱道した自然主義的文學が下火になるに従ひ、漸次頭を擡げて遂に之に代つて文壇の主流となるに至つたのである。

然しながら最近の青年讀者は、同じく青年の名で呼ばれるにしても、二十年前の青年に比べると著しい差別がある。感情的である、純眞である、精神的である、理想的である、詩歌的であると言つても、二十年前のそれとちがつて、世間知らずのお大名の若さでない。従つて其の愛好する文學も、若々しい文學といつても、一時代前の浪漫主義でなくて、世の中を知り悉した自然主義以後の新興浪漫主義の文學である。イブセンの劇が年譜の順に三階段をなして變つたことは前に述べたが、目下の青年はその第三階段の新理想主義の時期に在るものと見てよろしい。即ち感傷的にのみ流れた甘い作品に同感せず、唯に研究的思索的なむつか

しい作品にも共鳴せず、世の中の酸いも甘いも知り盡して而も感激の種切れになつてゐない作品を要求するのである。

明治の終から大正にかけての我國の新文學は、盡く此の性質に該當するとは言へないが、讀者との關係は大休此の範疇に入れて考へることが出来るのである。

歐洲大戰の思想界に及ぼした影響は甚だ深刻なものであるが、文學に對しても之に伴うて大きな陰影をかけてゐる。その中で特に目立つものは、自然主義的文學の極端に進んだものと、理想主義的文學の極端に走つたものとの二つである。就中後者は最も絶望的な境遇に陥つたドイツの文學界に起つた。それは Expressionism の名で呼ばれる文學である。

有るがまゝの人生を描いたのはナチュラリズムである。見るがまゝに寫し取つたイムプレツシヨニズムはこれと大差はないので、ナチュラリ

ズムの一種と見てよろしい。然し主觀の挿入せられるところに、後に起る新ロマンチズムの豫言がある。新ロマンチズムは即ち有らんとする人生、又は有らねばならぬ人生を描寫したものであつた。エクスプレツシヨニズムは更に之を極端にしたものであつて、大戰の慘禍に逢つて絶望のどん底におとし入れられ、その底から這上つて來た者の文學である。絶望が烈しかつただけ反動が烈しくて、極端な人生肯定に飛込んだわけである。

ロシア及スカンジネビヤの作家を通じて見られる特色は、悲觀すべき現實を見つめながら、之に征服せられないで、熱意を以て其の中から浮び上らうとすることである。泥の中からも眞珠を見つけ出さうとする態度である。此の人類愛の思想が、大戰のために絶望的の境に追込まれたドイツ青年作家に移されて、こゝに文學上のエクスプレツシヨニズム

が起つたのである。エクスプレッショニズムは、始めは繪畫に起り、次に劇に入り、詩歌小説に推及ほして來たものであるが、まだ渾沌として海のものとも山のものとも分らない。大作家といふべきほどの人もなければ、傑作と稱すべきものもまだ出ない。唯今までに出たものを見ると、作者の主張が強調されて出てゐるだけで、具体の重みを有たない主觀の露出がなま／＼しく見られるばかりである。脚色あり、人物があり、事件があつても、それは結論を引出す道具に使はれるだけで、實在の人物であり事件であるといふ感じが起らない。讀者には、結論を了解しきへすれば、途中の事實はどうでも善いものになつてしまふ。要するに藝術としてはまだ未熟なもので、後日大作の出る可能性はあるが、まだ反動藝術の動搖期に屬する。無論我が國にはまだ見られない作風である。然しながら、ドイツの青年作家はこんなものを作らないではゐられなかつ

たのであるから、是亦一つの新理想派の文學として、文壇の大勢に關與することを認めなければならぬ。

一八 人間味の文學

文學に取扱はれる人間、乃至人間生活には、大略三種の型がある。第一は高うして仰ぎ見るべきもの、第二は低うして見下すべきもの、第三は高からず、低からず等分に見比べて親しく接すべきもの。

茲に英雄あり、神機妙算立ろに成り、行動すべて人間業とも思はれない。こゝに藝術家あり、藝道のためには多年の恩を棄てて師匠に背き、絶ち難い戀を絶つて愛人をも棄てる。こゝに忠臣あり、最愛の一子为主君の身代りに捧げ、忍ぶべからざる惨苦にも堪んずる。其の他高僧哲人烈女のやうな傑出したものを始め、科擧者教育家事務家のやうな尋常の業務に従事するものに至るまで、此の種のヒロイックな生活を營むもの

は、即ち第一種の型に屬するのである。

一青年あり、奸智と世才と美貌とを用ひて誘惑を試み策略を弄し、利欲のためには爲さざるなしといふ状態で、薄給の雇會社員から大新聞の社長に成上る。又一人の壯年男子あり、少年の日の純潔心と正義感とを失つて、甚しく肉體的になり、食色をあさつて本能に殉ずるやうな所業をなすに至る。其の他酒毒の遺傳で荒みきつた淫蕩生活をする女がある。父の因果が子に報いて精神的缺陷の年と共に暴露して來るものがある。泥路を引ずつて行くやうな頽廢した生き方で、何時晴々しい日を拜むといふ希望もなしに、どん底の生活に甘んずる青年がある。此の種の獸のやうな生活を營むものは、即ち第二種の型に屬するものである。

一人の高僧がある。法を求めて異郷に旅した。此の旅もとより生還を期せられないし、家郷に未練を残すはずもなかつた。而も積年異人の間

に住み同行の人に死別れて、孤影私かに悲みを懷ふやうになる。偶々故國の産物を目にしては涙せずにはゐられなかつた。病に臥してはすゞろに郷國の食が戀しくなつた。此の種の生活は即ち第三種に屬するもので、手の届かない高い所にゐると思つた人も、之を見ると親しむべきなつかしいものになる。

以上三つの生活相は、文學の題材として取扱はれた跡を見ると、大體歴史的に次序をなして現はれてゐるので、三者が互に波をなして相消長してゐる様子が分る。即ち第一の相は舊浪漫主義の文學に現はれるもので、大體に於いて十九世紀以前の文壇に榮えたものであり、第二の相は自然主義の文學に現はれるもので、大略十九世紀半ば以後の文壇に行はれた題材であり、第三の相は新浪漫主義の文學に現はれるもので、大凡二十世紀の文學界に主要な題材として取扱はれるものである。

右三種の中第三のものは、我が文壇に於いても、最近可なり目立つて行はれる題材である。假りに之を人間性に立脚した著想と言ひ、或は又人間味の描寫と言ふなら、最近文壇の主要題材の一つは、神にあらず獸にあらず人間であると稱して善からう。無論此の人間性といひ人間味といふ言葉は、哲學的又は科學的の名稱でなくて、全く常識的の稱呼である。神人、佛陀、天使、仙人、聖賢、高僧、英傑、忠臣孝子、節婦烈女等が、神性を帯び神味を有つてゐるのに對し、又鬼魔、凡人、俗物、狂者、デカダン等が、獸性を帯び獸味を有つてゐるのに對し、凡俗にも聖賢にも人性を認め人味を見ると言ふ程の意義に用ひるのである。

人間は本來一むきに偏つてゐるものでない。本居宣長が源氏物語の評論に用ひた言葉を借りていへば、漢文に見える人物評のやうに一かたにつきぎりのものではない。常に變化流動するものであるから、色々の性

情を兼ねてゐる。神性と獸性とを併せ有ち、聖人と悪人とを兼具してゐる。凡夫にして佛性を具へてゐるのが即ち人間である。斯うしたライフは、第一のライフが高うして近づき難く、眞似難きに對し、又第二のライフが低うして近づき難く、親しみ難きに對し、最も親しくなつかしく覺えるものである。

此の見方でライフの描寫を試みた文學が、最近の文壇に可なり著しく見られる。例へばイエスといふ人物を扱つて小説を作るに、神の子と扱ひ、超人間的性格を附與し、清淨受胎で出生せしめ、奇蹟を行はしめ、復活せしめ昇天せしめるのは、第一の見方であるが、凡庸の腕白で悪戯もすれば喧嘩もする唯の子供であるものが、救主出現の豫言と故國現状の衰廢とを照し見てすゞろに英傑憧憬の念に堪へず、時勢の促すところ救主の自覺を起す者世に輩出するを聞いて、我こそ救主キリストではな

いかといふ信念を持つやうになつた一個の宗教的天才と見るのが、即ち第三の見方である。イエスは救主の自覺を起した人間の中の一人であつて、決して神秘不可思議の存在、人間以上の靈物でない。聰明で熱意があり、神経が鋭敏で頭腦の透徹した、自信の強い人間である。肺病を病んで生理的に此の傾向を進め、且當時の傳説や豫言から精神的に暗示を得、遂に神の子といふ確信を有つたのである。確信といつても人間のことであるから、時にぐらつくこともある。地上の天國を建設することの可能を信じて猛進の意氣を振り起すこともあるが、そんな大力量のないやうに思ひくづをれることもある。奇蹟は催眠術だから、自信の旺盛な時にはよく行はれるが、自疑の念一たび萌すと直ちに失敗する。肉體的欲求の淡泊であるのは病弱のせるであるけれども、青春の情で戀を思ふことが無いでもない。萬民の父にならうと志すものが、一家の夫となり

父となることは妥當でないが、マゲダラのマリヤを妻にと思ふこともある。萬人を愛する神の心と志すのであるが、我が直弟子十二人をすら同等に愛することが出来ないで、ユダを憎ますにはゐられない。怒りの心勃發して亂暴に近い所業もないではなく、凡人同様に後悔の念に悩みもするのである。説教も亦譬喩の巧妙と天賦の辯才とで、人を烟に捲くだけで、論理も體系もなく、大切の神の解神の國の説などでさへ判然と組織立つてゐなかつた。却つてマリヤやユダの説によつて啓發せられる始末である。その奇蹟も催眠術のかゝらない連中には効果が無いので、祭司の徒に捕へられる時に何の力も現はし得なかつた。復活は彼れの信念ではあるが事實にはならない、マリヤが紅涙を濺いだ墓の中にいつまでもそのまゝに横はつてゐるのである。

耶蘇をこんな見方で取扱つたのが、江原小彌太の「新約」であるが、救世

主イエスがこれによつてみじめに引ずりおろされたやうにも解せられるが、又却つて親しむべき一個の人間になつたとも言へる。同じく引ずりおろすにしても、反動がきゝ過ぎて彼れの物欲を描いたり、衝動的な行爲を寫したり、残忍性の發動を想像したりして、ひたすら獸性をのみ強調するのでは、これ亦人間に遠くなる。昔ダンテは神曲を書いたが、十九世紀のゾラは獸曲を作つた。何れも人生の一面を穿つてはゐるが、近より難い畏ろしさ氣味わるさがある。二者の中間を行つたのが即ち普通の人間の曲でなければならぬ。

例へば親鸞を題材にする時に、佛よ權現よと崇め立て、人間ならぬ聖人行者と祭り上げるのは、第一の見方である。之に反して肉食妻帯の欲求に燃え、色食の本能を暴露した破戒僧と見なし、獸性の一面を強調して描寫するのは第二の見方である。二者の中を執つて人間親鸞を認めら

のが、即ち第三の見方である。

彼れは人類の導師として自ら標置したり、佛菩薩の自覺を宣したり、權威を以て教を説いたりしない。自ら稱して惡人と言ふ通り、愛憎の念が胸中に往來し、戀の煩悶も經驗してゐる。若い血に狂ふ弟子を叱り得ないのみならず、佛を信じ得ぬ實子をも叱ることが出来ない。裁きは佛陀のみがなし得る事と思つてゐるのである。人の世には惡がある不調和がある、けれども又善がある調和がある。そこに冥々の中に動く佛の力を認めないわけにいかぬ。すべてを許容する彌陀の大願を信じないわけにいかぬ。此の彌陀に我をも人も人を任せ、彼れの心には此の絶對他力の信仰だけが燃えてゐる。斯う見るのが即ち人間としての親鸞の取扱である。

日蓮を強い人とはばかり理解すると、第一の見方になる。樗牛が彼れを

超人の適例と觀察したのを始めとして、逍遙の脚本「法難」に描き出した人物に至るまで、すべて勇猛果敢な人格に作り上げられてゐる。強い人は神人と同様に人間味に遠いので、人間はもつと弱い者である。老子は從來普通に觀察せられるところでは、精悍の氣眉宇に溢れ、眼晴に人を凌ぐの勢を藏する強い人であるが、之を無抵抗の愛に生きる消極的な人と理解する時には、弱い人に見える。哲學者道士といふいかめしいものではなくて、一個の人間になるのである。

此の取扱方をしたものに、尙ほ法然があり、孔子があり、マホメットがあり、すべて從來神性の方面からのみ解釋せられてゐたものを、人間に引直して見たものである。

以上は過去の人物、歴史上の著名な人格を取扱つた例ばかりを挙げたが、此の見方は廣く人類に亘るのだから、現代の通常人に對しても用ひ

られるので、悪人にも人間味を認め、英俊にも人間性を見出すこととなる。新浪漫主義の名で總稱せられるものの中に、最近重きをなす作風は即ちこれである。

一九 開拓者の悲劇 (跋に代へる)

少年の日の追懐から執り始めた筆が、記憶を辿つて段々近い頃の事に及んで来た。その間約三十年に過ぎないが、随分目まぐるしい變遷と開展とを経て来たものである。古代文學を研究してゐると、短くて五十年、長くば一世紀の間も、同様の状態で経過してゐるのを見受けることが往々あるが、明治大正はさすがに文學に於いても多事であつた。特に明治二十五年から四十五年に至る二十年間は、古今の歴史を通じて類例の少ない開展を遂げた時期である。

此の時期を劃してその光輝を今日に残した明治の御代の終末は、自己に取つて忘れ得ぬ思出である。當時書附けた斷想の綴りを繰りあけて見

ると、明治は遂に逝つた。文化のあらゆる方面に燦然たる光芒を残して永へに去つた。餘事は暫く措き、文藝の方面に於ける明治時代の名は、重大な意義のある劃期的の名である。その明治は去つたのである。なつかしい明治よ」と記してゐる。又「赫々たる天日が中空にして突如其の光を隠したやうな出来事である。七月三十日の御事は、草莽の微臣たる我等には、眞に寢耳に水であつた。舉措度を失ふ程の深い驚駭から辛うじて回復して見れば、我等はもはや明治の御代を過去の時代として眺めねばならぬ地位に立たされてゐるのであつた。爾來文壇の事を思ふ毎に、何とはなしに明治の文學といふ考が先に立つて来る。單に文學界の過去の時代といふのでなしに、明治の文學といふところの一の大きな意味があるやうに思へるのである」とも書いてゐる。自分は曾て「明治文學史」といふ小著を公にした。それは四十年の頃、まだ明治の時代といふものが斯う

も纏まりの附いた時期を劃するとは豫想しなかつた時の述作である。今にして思へば、明治文學史といふ名も、有り合せのお手輕な名でなかつた。

こんな時代にたちはたらいた文學者は、はたらきがひはあるが随分骨が折れたのである。千歳一遇の好時節に生れ合せた幸福はあつたが、苦勞は又一通りではなかつた。骨が折れても、苦勞を重ねても、それに報いられたものは結構であるが、縁の下の力持に終つたり、犬骨折つて鷹に取られたり、いはゆる時代の犠牲になつたものは誠に涙ぐましいほど氣の毒である。明治時代のやうに目まぐるしい變遷を遂げ、華々しい開展をなした時代を追憶すると、文壇の犠牲といふことを考へないではゐられない。

急激な開展は革命である。革命を起す者は先覺者である。先覺者は鐵

のまだはいらない曠野を開拓する人である。開拓者は命がけの努力を續けて遂にその道に仆れるものである。後継者のためには有難い事業ではあるが、當人のためには氣の毒な悲劇である。文壇の開拓者も、往々こんな運命に回り合せる。先驅者の悲劇といふことは、斯の如き時代に最も多く現はれる。

ヘーゲルが思想開展の法則を説いた辯證法は、有らゆる事物の歴史的開展の説明に應用せられるもので、正反合の開展形式は長へに繰返され、何事にも行はれるものである。歴史が繰返すといふのは此の形式の反覆を指すのである。形式は反覆するが、内容は常に新しいものを加へて行つて、こゝに開展を遂げる。其の生面を開き進展をなす所以は、即ち反斷の出現によるので、反斷の内容が新しければ新しいほど、優れてゐれば優れてゐるほど、史的開展は飛躍的のめざましさを見せるのである。

文學の開展も亦此の法式による。

此の反斷の提供せられるのは、沈滯固定爛熟の境に入つて、習俗に安んじ、因襲に囚はれ、現状維持の外に策のないといふやうな時勢に必ず有ること、文學界の江戸時代末期から明治の初年までは正しく之に該當する。こんな時勢には必ず反斷を提けて起つ新人が出るので、文學の新しい開展がこゝに始まる。

これらの新人は、多くは青年であつて、純眞潔白、利害を度外にして文學界の爲めに盡さうといふ熱意をもつてゐる。思慮分別は二の次にして思ひきつた冒険をやるのである。彼等は又多くは天才肌で、夢想家の素質をも有つてゐて、神來の逸興によつて清新な精神的活動をするのである。彼等は又多くは自我の人で、妥協を排し徹底を求め、強情で我儘で、因襲と教權とを棄却して始めから出直して來ようとするのである。

而して彼等は又多くは悲劇的人物であつて、苦悶を閲し落魄を味ひ、性格的に悩みを負うてゐるが故に、時には狂死し自殺するやうな人々もあるのである。

文學史上古來その例少くはないが、明治以後、最近三十年間に於いても、先覺者として痛ましい一生を文學に捧げた悲壯な努力を追憶することが出来る。

江戸時代末期の類唐文學に對して反斷の提供をなした二葉亭四迷の事業は、即ちその一例であつて、明治二十年といふ時代に、二十四歳の青年の身で、ゴンチャロフ張りの「浮雲」を書いた作者は、誠に天才肌で神経質な詩人であつた。詩人でありながら政事經濟外交の實務に本領を有するものと考へてゐたことなどは、最よく彼れの面目を發揮してゐるのである。而も小説界の開拓者、翻譯文學の先覺者としての功績を知られて、

心ゆくまでその誇らしい得意さを味ふことなくして、不滿の状態のまま、印度洋上に客死したのである。

又北村透谷が、元祿時代の遊戯的道樂的氣分の文學に摸倣した明治二十四五年の小説壇に對して、手ひどい攻撃を加へたのも、反斷提供の一つの實例である。二十五歳の青年詩人であつた透谷が、文壇知名の大家達を向うに廻して文學界の革新を叫んだ事實は、眞に先驅者の悲壯な奮闘であつた。而もその事の成果を見届けることなしに、不滿感傷の聲を擧げて、自ら天命を縮めたのである。小説「春」は彼れの性格と事業との痛ましい消息を描寫して、よく此の間の事情を盡してゐる。

又かの樋口一葉が、婦人運動といふことの未だ夢想だもせられなかつた時代に、無告の日本婦人のために代辯者として、虐けられたものの懊惱を二十餘篇の小説に描き出したことは、獨り文學を人生に觸れしめた

先覺の事蹟であるのみならず、我が婦人界に於ける開拓者の貴重な努力である。「たけくらべ」や「濁江」は、たゞに當年の小説に稀れな新しきと深みとを有つのみならず、二十四歳の青年女子が選手として戦つてゐる勇ましさと痛ましさを現はすものである。而も其の盛名に伴ふ正當の報酬を享受することなくして、寂しい家庭の中、生計の勞苦の間に、二十五歳で病死したのである。

又かの短詩革新の旗をあけて、從來の遊戯的空想的の詩歌を破壊した正岡子規は、反斷提供者として最も著しい事業を成した人である。彼れの革新的精神は、たゞに短詩界だけでなく、廣く文學の全般に亘る大規模のものであつて、燃えるやうな熱意と湧くが如き才思は、あらゆる文學の分野に革命の火を點けないでは措かなかつた。二十六歳の一青年俳人は、蕉蕪以後の第一人と言はれたのみならず、短歌に新体詩に、小品

文に短篇小説に、各其の足跡を印したのである。此の間の消息は、小説「柿二つ」によく寫されてゐる。而も永年の病苦、恵まれざる物質的生活、満されない家庭の快樂、斯うした寂しさの中に世を辭したのである。

又かの高山樗牛が、十九世紀文明の弊を慨し、文學界の沈滞を歎いて、美的生活を唱へ、近代主義の文學を論じ、現代の超越を説き、文明批評の文學を叫んだのは、すべてこれ先覺の聲であつて、たゞに當年の耳目を聳動しただけでなく、却つて次代の青年讀者に深く理解せられた豫言的の論議であつた。彼れの性格と事蹟とは、紛ふ方ない先驅者のそれであつて、狂飈時代の勇將として陣頭に目覺ましい戦死を遂げる資質を十分に具へてゐた。自分は曾て彼れを明治年間最大のロマンチケルだと稱したことがあるが、彼れの一生は誠に一篇の悲劇であつた。

其の他新体詩界の中西梅花や磯貝雲峰にしても、小説界の川上眉山や

國木田獨歩にしても、皆夫々の意味で斯道のためにはたらいで、土臺を築く仕事に従つた人達で、而もその功績に報いるだけの満足を得なかつた人達である。土臺を築くのは最も困難で、且つ最も割の悪い仕事である。それを承繼いで其上に建物を築くのは、比較的容易で、而も事功のよく見える仕事である。開拓者は即ち此の容易にして且つはでな仕事を後の人に譲つて、自らは一將の功を成さしめんが爲に枯骨となることを辭さないのである。

要するに、此の種の人々は文壇の殊勳者にして且つ犠牲者である。言はば多く與へて少しく酬いられる人々である。美しくして且つ脆い寶玉である。後の文學社會は彼等から受けた大なる恩恵を感銘しなければならぬ。

附録 明治大正文學年表

明治大正文學年表

安政六年

坪内逍遙生る(五月)

萬延元年

三宅雪嶺生る(五月)

文久元年

廣津柳浪生る(七月)

落合直文生る(十一月)

同二年

森鷗外生る(一月)

同三年

徳富蘇峰生る(一月)

元治元年

二葉亭四迷生る(二月)

大西操山生る(八月)

明治大正文學年表

慶應三年

- 夏目漱石生る(一月)
- 齋藤綠雨生る(三月)
- 正岡子規生る(九月)
- 尾崎紅葉生る(十二月)
- 幸田露伴生る

明治元年

- 江戸を東京と改稱す。
- 東京に遷都す。
- 大政官日誌、中外新聞、江湖新聞出づ。

- 山田美妙齋生る(七月)
- 北村透谷生る。

明治二年

- 宮中歌御會復興せらる。
- 出版條例新聞條例を發布せらる。
- 府縣に小學校設立せらる。
- 大學校成立す。
- 福澤諭吉著世界國盡出づ。
- 川上眉山生る(三月)

明治三年

- 假名垣魯文作西洋道中膝栗毛第一編出づ、同五年完結。
- 中村正直譯西國立志編出づ。
- 府に中學校設置せらる。
- 巖谷小波生る(六月)

明治四年

- 日刊新聞始祖横濱毎日新聞出づ。
- 魯文作安愚樂鍋出づ。
- 留學女生五名米國に渡る。
- 島村抱月生る(一月)
- 高山樗牛生る(一月)

- 國木田獨歩生る(七月)
- 由山花袋生る(十二月)
- 徳田秋聲生る(十二月)
- 土井晩翠生る。

明治五年

- 東京日々新聞、郵便報知新聞出づ。
- 福澤著學問のすゝめ初編出づ、九年第十七編を出して完結す。
- 東京に女學校を設く。
- 東京に圖書館を開く。
- 學制を頒布す。

太陽曆を用ひる。

〽島崎藤村生る(二月)

〽樋口一葉生る(三月)

〽河東碧梧桐生る。

明治六年

東京外國語學校設置せらる。

森有禮等明六社を起す。

福澤著文字の教出づ。

〇綱島梁川生る。

〽岩野泡鳴生る(二月)

〽與謝野鐵幹生る(二月)

〽泉鏡花生る。

明治七年

民選議院設立の建議起る。

明六社明六雜誌を發刊す。

朝野新聞、讀賣新聞出づ。

羅馬字採用論起る。

〽高濱虛子生る(二月)

〽上田柳村生る(十月)

明治八年

洋々社談發刊せらる。

新島襄京都に同志社を起す。

明六雜誌廢刊。

〽小栗風葉生る(二月)

明治九年

〽蒲原有明生る(三月)

明治十年

鹿兒島に反亂起る、九月平定す。

團々珍聞、穎才新誌出づ。

大學校東京大學と改稱す。

〽薄田泣菫生る(五月)

〽中村吉藏生る(五月)

明治十一年

民權自由説唱へらる。

新富座開かる。

〽有島武郎生る(三月)

〽與謝野晶子生る(十二月)

明治十二年

學士會院を設く。

大阪朝日新聞發刊せらる。

教育令公布せらる。

國會開設の請願建白出づ。

織田純一郎譯花柳春話出づ。

正宗白鳥生る(三月)

長塚節生る(四月)

永井荷風生る(十二月)

明治十三年

東京大學文學科始めて卒業生を出す。

六合雜誌發刊せらる。

明治十四年

東洋學藝雜誌發刊せらる。

國會開設の大詔發せらる。

自由黨結黨せらる。

小山内薫生る(七月)

明治十五年

時事新報發刊せらる。

外山、山等作新体詩抄出づ。

第一回繪畫共進會開催せらる。

中江兆民譯民約譯解。

東京專門學校早稻田に設立せらる。

竹内節編新体詩歌出づ。

小川未明生る(四月)

兆民譯維氏美學出づ。

矢野龍溪譯經國美談出づ。

逍遙譯自由太刀餘波銳鋒出づ。

志賀直哉生る(二月)

明治十七年

藤田鳴鶴作文明東漸史出づ。

成島柳北死す四十八歳。

かなのくわい起る。

荻原井泉水生る(六月)

明治十八年

紅葉等硯友社を結ぶ。

逍遙著小説神髓出づ。

同作當世書生氣質出づ。

官制を改革し内閣を設置す。

ローマ字會起る。

鳴鶴譯繫思談出づ。

雪嶺等政教社を結ぶ。

武者小路實篤生る(五月)

明治十九年

反省雜誌發刊せらる。
 帝國大學令發布せらる。
 明治學院設立せらる。
 末廣鐵腸作雪中梅出づ。
 演劇改良會起る。
 美妙齋作風琴調一節出づ。
 柴東海散士作佳人の奇遇初編出づ。
 蘇峰著將來の日本出づ。
 石川啄木生る(一月)

明治二十年

蘇峰民友社を設け雜誌國民の友を發刊す。

哲學雜誌發刊せらる。
 鐵腸作花間鶯出づ。
 鹿鳴館假裝舞蹈會開催せらる。
 學位令公布せらる。
 二葉亭作浮雲上巻出づ。
 美妙齋雜誌以良都女を發刊す。
 出版月評發刊せらる。
 東京音樂學校設立せらる。
 東京美術學校設立せらる。
 美妙紅葉作新休詩選出づ。

明治二十一年

二葉亭作浮雲第二編出づ。

政教社の雜誌日本人發刊せらる。

硯友社の雜誌我樂多文庫發刊せらる。

東京朝日新聞發刊せらる。

二葉亭譯あひびき國民の友に出づ。

美妙齋集夏木立出づ。

小説雜誌都の花同小説萃錦同大和錦發刊せらる。

二葉亭譯めぐりあひ都の花に出づ。

女學雜誌發刊せらる。

大阪毎日新聞發刊せらる。

壯士芝居起る。

夫松青萍譯谷間の姫百合出づ。

明治二十二年

美妙齋作胡蝶逍遙作細君思軒譯探偵ユ-

ベル國民の友に出づ。

矢崎嵯峨の屋作初戀都の花に出づ。

雜誌新小説發刊せらる。

大和田建樹作いさり火出づ。

憲法發布せらる。

露伴作露團々都の花に出づ。

新聞日本發刊せらる。

紅葉作色懺悔新著百種に出づ。

高田半峰著美辭學出づ。

眉山作黃菊白菊出づ。

饗庭算村集むら竹第一編出づ。

鷗外等譯詩於母影國民の友に出づ。

二葉亭作浮雲續篇都の花に出づ。

露伴作風流佛新著百種に出づ。

東京專門學校文學科創立せらる。

鷗外等雜誌柵草紙を發刊す。

歌舞伎座落成す。

柳浪作殘菊新著百種に出づ。

演藝協會設立せらる。

明治二十三年

鷗外作舞姬國民の友に出づ。

新島襄死す。

蘇峰國民新聞を發刊す。

宮崎湖處子作歸省出づ。

國學院設立せらる。

教育勅語發布せらる。

明治二十四年

中西梅花作新休梅花詩集出づ。

中村正直死す、六十歳。

紅葉作二人女房都の花に出づ。
逍遙等雜誌早稻田文學を發刊す。
綠雨作油地獄及かくれんぼ出づ。

明治二十五年

鷗外譯作集水沫集出づ。

露伴作五重塔出づ。

子規俳句革新運動を始む。

直文淺香社を結ぶ。

明治二十六年

古河默阿彌死す、七十八歳。

透谷等雜誌文學界を發刊す。
子規論集癩祭書屋俳話出づ。
逍遙史劇論早稻田文學に出づ。
内田不知庵譯罪と罰出づ。
民友社同人著十二文豪出づ。

明治二十七年

透谷死す、二十七歳。

清國と開戦す。

柵草紙廢刊。

魯文死す、六十六歳。

逍遙作桐一葉早稻田文學に出づ。

透谷集出づ。

明治二十八年

雜誌帝國文學發刊せらる。

雜誌太陽發刊せらる。

雜誌文藝俱樂部發刊せらる。

清國と講和す。

雜誌文庫發刊せらる。

一葉作濁江及たけくらべ出づ。

南新二死す。

関秀小説出づ。

明治二十九年

鷗外等雜誌めざまし草を發刊す。

逍遙作牧の方早稻田文學に出づ。

紅葉作多情多恨讀賣新聞に出づ。

若松賤子死す、三十二歳。

鐵腸死す、四十九歳。

雜誌新小説再興せらる。

竹越三又等雜誌世界の日本を發刊す。

二葉亭譯片戀出づ。

一葉死す、二十五歳。

鷗外論集つき草出づ。

雜誌新聲發刊せらる。

明治三十年

紅葉作金色夜叉讀賣に出づ。

一葉全集出づ。

藤村作天馬及深林の逍遙出づ。

晚翠作破鐘の響帝國文學に出づ。

二葉亭譯浮草太陽に出づ。

新休詩集抒情詩出づ。

鷗外喜美子翻譯集かけ草出づ。

藤村詩集若菜集出づ。

逍遙作沓手鳥孤城落月新小説に出づ。

森田思軒死す、三十七歳。
雜誌文學界廢刊。

明治三十一年

子規の短歌革新論日本に出づ。

子規等の句集新俳句出づ。

國民の友廢刊。

早稻田文學廢刊。

雜誌ホトトギス發刊せらる。

明治三十二年

徳富蘆花作不如歸國民新聞に出づ。

反省雜誌中央公論と改題す。

高等女學校令私立學校令發布せらる。

晚翠詩集天地有情出づ。

矢田部尙今死す、四十九歳。

泣菫詩集暮笛集出づ。

子規寫生文ホトトギスに出づ。

明治三十三年

外山、山死す、五十三歳。

新詩社の雜誌明星發刊せらる。

操山死す、三十七歳。

雜誌小天地發刊せらる。

明治三十四年

樗牛ニイチエ論太陽に出づ。

清澤滿之等雜誌精神界を發刊す。

福澤諭吉死す、六十八歳。

獨歩短篇集武藏野出づ。

子規等句集春夏秋冬出づ。

晚翠詩集曉鐘出づ。

大橋乙羽死す、三十三歳。

藤村詩集落梅集出づ。

樗牛美的生活論太陽に出づ。

泡鳴詩集露しも出づ。

晶子歌集亂れ髪出づ。

兆民死す、

高安月郊譯イブセン作社會劇出づ。

明治三十五年

子規死す、三十六歳。

鷗外譯即興詩人出づ。

透谷全集出づ。

樗牛死す、三十三歳。

明治三十六年

鷗外脚本玉匣兩浦島出づ。

俳優尾上菊五郎死す。

専門學校令發布せらる。

有明詩集獨絃哀歌出づ。

滿之死す。

子規等作寫生文集出づ。

俳優市川團十郎死す。

紅葉死す、三十七歳。

直文死す、四十三歳。

大西博士全集第一卷出づ。

明治三十七年

紅葉全集樗牛全集出づ。

露國と開戦す。

綠雨死す、三十八歳。

原抱一庵死す、三十九歳。

俳優市川左團次死す。

小泉八雲死す、五十四歳。

逍遙著新樂劇論及同作新曲浦島出づ。

子規歌集竹の里歌出づ。

雜誌新潮發刊せらる。

明治二十八年

漱石作我輩は猫であるホトトギスに出づ。

風葉作青春讀賣新聞に出づ。

梁川見神論雜誌新人に出づ。

有明詩集春鳥集出づ。

啄木詩集あこがれ出づ。

黨詩集小野のわかれ出づ。

梁川著病間録出づ。

露國と講和す。

明治二十九年

早稻田文學再興せらる。

柳村譯詩集海潮音出づ。

福地櫻痴死す、六十六歳。

逍遙文藝協會を設立す。

藤村作小説破戒出づ。

獨歩集運命出づ。

雜誌文章世界及趣味發刊せらる。

漱石集漾虛集出づ。

直文作秋の家歌集出づ。

泡鳴論集神秘的半獸主義出づ。

京都帝國大學文科を開く。

二葉亭作其の面影東京朝日に出づ。

秋聲作己が縛萬朝報に出づ。

岩城準太郎著明治文學史出づ。

明治四十年

漱石集鶉籠出づ。

白鳥作塵埃趣味に出づ。

思軒全集第一出づ。

花袋作蒲團新小説に出づ。

梁川死す、三十六歳。

陸羯南死す、五十一歳。

白鳥集紅塵出づ。

秋聲作凋落讀賣新聞に出づ。

文部省第一回美術展覽會を開く。

黨等雜誌新思潮を發刊す。

二葉亭作平凡朝日新聞に出づ。

明治四十一年

- 虚子集鶏頭出づ。
- 未明集縁髪出づ。
- 虚子作俳諧師國民新聞に出づ。
- 藤村作春朝日新聞に出づ。
- 花袋作生讀賣新聞に出づ。
- 泡鳴詩集闇の盃盤出づ。
- 眉山死す、四十歳。
- 獨歩死す、三十八歳。
- 二葉亭譯血笑記出づ。
- 長谷川天溪論集自然主義出づ。

- 服部撫松死す、六十八歳。
- 白鳥集何處へ出づ。
- 雜誌アラギ發刊せらる。
- 雜誌明星廢刊。

明治四十二年

- 鷗外等雜誌スバルを發刊す。
- 森田草平作煤烟東京朝日に出づ。
- 碧梧桐俳句の新傾向論日本人に出づ。
- 同編日本俳句抄出づ。
- 北原白秋詩集邪宗門出づ。
- 抱月論集近代文藝の研究出づ。

- 荷風集歡樂出づ。
- 二葉亭死す、四十六歳。
- 白鳥集二家族出づ。
- 子規句集出づ。
- 三木露風詩集廢園出づ。
- 鷗外譯脚本一幕物出づ。
- 同譯ボルクマン國民新聞に出づ。
- 眉山全集出づ。
- 岩城準太郎著増補明治文學史出づ。
- 小山内薫自由劇場を設立す。
- 自由詩社起る、口語詩論唱へらる。
- 荷風作冷笑東京朝日に出づ。

依田百川死す、七十七歳。

明治四十三年

- 藤村作家讀賣に出づ。
- 雜誌白樺及三田文學發刊せらる。
- 鈴木三重吉作小鳥の巢國民新聞に出づ。
- 二葉亭全集及獨歩全集出づ。
- 雜誌新思潮再興せらる。
- 長塚節作土東京朝日に出づ。
- 泡鳴作放浪出づ。
- 美妙齋死す、四十三歳。
- 建樹死す、五十三歳。

啄木歌集一握の砂。

明治四十四年

晶子歌集春泥集出づ。

井泉水等俳句雜誌層雲を發刊す。

文部省文藝委員會官制を發布す。

平塚明子等雜誌青鞜を發刊す。

谷崎潤一郎集刺青出づ。

無政府主義者幸徳秋水等刑せらる。

文藝協會公演に抱月譯人形の家を演ず。

明治四十五年、大正元年

高崎正風死す。

啄木死す、二十七歳。

厨川白村著近代文學十講出づ。

改訂一葉全集上巻出づ。

文藝協會公演、抱月譯故郷を演ず。

啄木歌集悲しき玩具出づ。

泡鳴作發展出づ。

鷗外脚本集我一幕物。

文藝委員會逍遙を選奨す。

實篤作世間知らず出づ。

直哉集留女出づ。

大正二年

鷗外譯ファウスト出づ。

幸堂得知死す、七十一歳。

伊藤左千夫死す、五十歳。

啄木歌集出づ。

文藝委員會廢せらる。

文藝協會解散す。

抱月藝術座を組織す。

齋藤茂吉歌集赤光出づ。

新劇團連りに起る。

大野洒竹死す、四十二歳。

雑誌スバル廢刊。

大正三年

俳句集自然の扉出づ。

藝術座公演に抱月譯復活を演ず。

歐州大戰始まる、青島を攻略す。

西洋文學の翻譯物多く出づ。

大正四年

節死す、三十七歳。

瀬沼夏葉死す、四十一歳。

子規遺稿出づ。

碧梧桐等俳句雜誌海紅を發刊す。
中村吉藏作新社會劇出づ。
土居春曙死す、四十六歳。

大正五年

花袋全集第一出づ。
漱石作明暗朝日新聞に出づ。
角田浩々歌客死す、四十八歳。
柳村死す、四十三歳。
里見弴集善心惡心に出づ。
漱石死す、五十歳。
雜誌新思潮三興せらる。

大正六年

長塚節歌集出づ。
芥川龍之介集羅生門出づ。
逍遙作名殘星月夜中央公論に出づ。
有島武郎著作集第一死出づ。
花袋作殘雪出づ。
直哉作和解出づ。
倉田百三作出家と其弟子出づ。
高安月郊著作集出づ。

大正七年

漱石全集第一巻出づ。
藤村作新生東京朝日に出づ。
逍遙作義時の最期中央公論に出づ。
鷗外集高瀬舟出づ。
實篤論集新しき村の生活出づ。
菊地寛作忠直卿行狀記出づ。
抱月死す、四十八歳。
歐洲大戰終る。
福田徳三吉野作造等黎明會を起す。

大正八年

抱月全集啄木全集出づ。

大正九年

婦人問題論せらる。
雜誌改造、解放、現代等發刊せらる。
詩話會編日本詩集出づ。
富田碎花譯草の葉第一出づ。
露風等編日本象徴詩集出づ。
宮崎三昧死す、六十一歳。
晶子短歌全集第一出づ。
新婦人協會設立せらる。
泡鳴死す、四十八歳。
菊地寛脚木集藤十郎の戀出づ。

左千夫全集第一歌集出づ。

柳村詩集牧羊神出づ。

武郎譯ホイットマン詩集第一輯出づ。

黒岩涙香死す、五十九歳。

須藤南翠死す、六十三歳。

中澤臨川死す、四十三歳。

雑誌人間發刊せらる。

大正十年

江原小彌太作新約、舊約、復活出づ。

西洋文學の翻譯全集多く出づ。

泡鳴全集出づ。

雑誌明星再興せらる。

逍遙作我ページェント劇出づ。

大正十一年

藤村全集第一出づ。

武郎作星座第一出づ。

箕村死す、六十八歳。

鷗外死す、六十一歳。

直哉作暗夜行路前編出づ。

逍遙作家庭用兒童劇出づ。

宮崎湖處子死す。

短詩及童謡連りに出づ。

水平社各地に起る。

大正十二年

鷗外全集第一出づ。

文部省常用漢字一九六三字選定の件を發表す。

蘇峰著近世日本國民史學士院より選獎せらる。

武郎死す、四十六歳。

花袋著近代の小説出づ。

關東に大震火災起り、出版界大打撃を受く。

明治大正の國文學索引 (人名。書名。件名)

あ

- 悪魔主義……………一九。二六
- あひびき……………三三。三四
- 櫻庭篁村……………二
- 有島武郎……………一九〇

い、る

- 磯貝雲峰……………五〇。五五

- 一葉全集……………六二。六七

- 泉鏡花……………八五

- 伊藤左千夫……………四五

- 岩野泡鳴……………五四。八六。九〇。一四六。一八一

- イブセン作社會劇……………一六二。三九

- 以良都女……………五一

- 井上巽軒……………四八

う、え

浮雲……………二七、二七〇、二六〇、二五一
 上田柳村……………一八〇、二六
 運命……………九七、一九六
 江原小彌太……………二四二

お、を

落合直文……………五三、五八
 己が縛……………九八、一八五
 大西操山……………五五、一八〇
 於母影……………五三
 荻原井泉水……………一〇〇
 小栗風葉……………八六、一四〇、一八一

尾崎紅葉……………一一、五二、八五、一三八、一八〇
 小山内薫……………一七一

か

海潮音……………二六
 幸田露伴……………一一〇、一五七、二〇一、一八〇
 柿二つ……………四一、一五五
 佳人の奇遇……………一三三
 雅俗折衷体……………一三八
 河東碧梧桐……………四〇、一〇〇、一八一
 川上眉山……………七〇、八五、一四〇、一五五
 蒲原有明……………三四、八五、一八一、二六

草枕……………一〇一

く、け

近代主義……………八四、八八、九四
 桐一葉……………一五四、一六〇
 享樂主義……………一九八、二六
 狂飈時代……………八六、一〇〇、一四三、一六一、一五五
 伽羅枕……………一一
 北村透谷……………一一〇、一三三、一五七、一八〇、一五三
 歸省……………五五

き

國木田獨步……………三三、五八、九七、一三六、一八一、二六六
 經國美談……………一三三
 閨秀小説……………一六〇
 硯友社……………一一〇、一四八
 言文一致……………二九、一五〇

こ

國民の友……………三三、五七、一八〇
 小杉天外……………八六、一八一
 胡蝶……………一三三、一三七
 金色夜叉……………一五

さ
 齋藤緑雨……………一七〇、一七五
 残雪……………二二九
 自由劇場……………一七一
 柵草紙……………七八
 志賀直哉……………一九〇
 自然主義……………一〇〇、一〇六、一七九、一九〇、一九五
 児童劇……………一五六
 柴東海散士……………一三三

じ
 十三夜……………六〇
 島崎藤村……………一七三、一七四、一七五、一八四、一八六、一八七、一九〇、一九一
 島村抱月……………一四三、一四七、一八〇、一九〇
 寫生文……………一四一
 象徴主義……………二四〇、二四五
 春泥集……………一八五
 春鳥集……………一六六、一七六
 白樺……………一九〇
 新俳句……………四〇
 新休詩……………三七、四〇
 新休詩歌……………四六

新休詩抄……………四九
 新休梅花詩集……………五五
 新曲浦島……………一五六
 新生……………一三九
 人道主義……………一九八、二〇〇、二〇三
 新約……………二四二
 新浪漫主義……………一九五、一九八、二〇三、二〇四、二〇六
 新理想主義……………一九二、一九八、二〇三、二〇四、二〇六
 す
 末廣鏡腸……………一三三
 薄田泣菫……………五三、一三六

せ、そ
 鈴木三重吉……………一九〇
 青春……………一八五
 小説神髓……………一一六、四三三、四五三
 層雲……………一〇〇
 た、ち
 當世書生氣質……………一五二、一五三
 高山樗牛……………一〇二、一〇三
 九四、一〇一、一〇四、一四三、一八八、二二八、二四四、二五五
 高濱虚子……………四〇、一七一、一八一

高安月郊……………一六〇、二九
 たけくらべ……………六〇、六二、五四
 多情多恨……………一四〇
 瀬祭書屋俳話……………三六
 爛……………三九
 谷崎潤一郎……………一九〇
 玉匣兩浦島……………一六三
 田山花袋……………三四、五八、九〇、三六、四六、八〇、三九
 探偵ユーベル……………二五
 耽美主義……………一九八、二六
 女學雜誌……………一一、五一

坪内逍遙……………一一、二五、三三、三七、四〇
 一五〇、一六〇、一六八、一七〇、一八〇、二四五
 土井晚翠……………五八、八五、九
 綱島梁川……………八
 妻……………九

て

帝國文學……………五八、一四〇
 デカダン……………二六、三七
 天地有情……………五八

こ

東洋學藝雜誌……………四八、五
 透谷集……………五
 透谷全集……………一三、一七
 戸川殘花……………五
 徳富蘇峰……………二二
 徳富蘆花……………六
 徳田秋聲……………八六、九〇、一四六、一八〇、三九
 外山、山……………四

な

長塚節……………四
 中西梅花……………五四、五五
 中江兆民……………八
 名残星月夜……………一五八
 夏木立……………二九
 夏目漱石……………四〇、四七、一八〇、二〇〇
 成島柳北……………二二
 に
 にごり江……………六〇、一五四
 日蓮上人辻説法……………一六三
 日本新聞……………三六、一四

日本派……………四〇
 二人女房……………一三九
 根岸派……………四七
 人形の家……………一五七、一六一

は

破戒……………九四、一八三
 白羊宮……………一三六
 長谷川天溪……………一八一
 馬場孤蝶……………一七、五五
 春……………一七、九六、一八〇、一八五

ひ

樋口一葉……………六〇、一四〇、一五三
 一幕物……………一三三
 廣津柳浪……………八五、一〇〇、一六一、一四〇
 悲戀悲歌……………九〇、一八六

ふ

福地櫻痴……………一三三、一五三
 福澤諭吉……………一四四
 二葉亭四迷……………一三三、一三七、一三七、一八〇、一五一
 蒲團……………九四、一八五

文學界……………一七、三三、五五、六一
 文藝協會……………一五七、一七〇、一八七

へ、ほ

表現主義……………一三二
 ページエント……………一五八
 沓手鳥孤城落月……………一五四
 ほととぎす……………四三

ま

牧の方……………一五四
 正岡子規……………三三〇、四〇六、一四二、一八〇、二五四

正宗白鳥……………一四六
 松岡國男……………三三、五八、一八五

み

三田文學……………一九〇
 明星……………四五、八五、九八
 雛の花……………三三、六二
 宮崎湖處子……………五五

む、め

武藏野……………一三六、一三三
 武者小路實篤……………一九〇

明暗……………101
めぐりあひ……………三三、三五

も

森鷗外……………五三、四〇、四三、一〇〇、一〇三、一〇八
森田思軒……………一四
森田草平……………一九〇

や

矢崎嵯峨の屋……………五五、六〇、一六
矢田部尙今……………四
矢野龍溪……………一三

山田美妙齋……………五二、二六、三七、一八〇

よ

與謝野鐵幹……………四五、五八
與謝野晶子……………九〇、一九六
義時の最期……………一五八

ら、わ

落梅集……………一八三
若菜集……………五八、四四、一八二
わかれ道……………六
我輩は猫である……………一〇〇

早稲田文學……………一四〇、一五三、一九〇

索引終

大正十四年九月十日印刷
大正十四年九月十五日發行



明治大正の國文學叢書

發行所

定價 貳圓五十錢

著者 岩城準太郎

發行者 東京市神田區錦町三丁目廿番地 博多久吉

印刷者 大阪市西區阿波座中通二丁目四番地 井下精一郎

印刷所 大阪市西區阿波座中通二丁目四番地 井下書籍印刷所

東京市神田區錦町三丁目廿番地
大阪市南區大寶寺町西之丁二十二番地

成象堂

振替 東京五二六〇七番
大阪七三三三番
電話 特南壹壹七七番

544
93

終

